

Richard II について

—王位の正統性と劇的構成—

則 藤 力

I

最初の全集である第一・二つ折版 (The First Folio, 1623) のうち史劇は十を数える。その中 *King John* と *Henry VIII* を除き、八つは *Richard II* から始まって、ヨーク家とランカスター家の王権を巡る争い、薔薇戦争の終結部を描いた *Richard III* 迄の時代を扱ったものである。リチャード二世の退位に始まり、ヘンリー・チューダーによる内乱の収束に至るおよそ百年のこの時期は、イギリス史全体では無論のこと、エリザベス朝の人々にとってゆるがせに出来ない切実な問題を含む時代であった。

というのは、ヘンリー七世によって平和が戻ってきたものの、その息子ヘンリー八世は離婚問題からローマ・カトリック教会と袂を分かち、イギリス国教会を起こしてその長となった。更に彼の死後、王位継承権を巡ってフランスとスペインが虎視眈々とイギリスをねらっており、カトリックとプロテスタントとの複雑な宗教問題とも絡まって、エリザベス女王の地歩は決して大盤石の上に立っているわけではなかった。まかり間違えばまたぞろ第二の薔薇戦争、或いは対フランス、スペインとの戦争に巻き込まれかねない状況は、エリザベス朝の人々に王権の孕む問題に無関心ではいられなくしたはずである。従ってシェイクスピアの史劇は、単に過去の歴史を描いた演劇であるばかりではなく、現実の問題として直面せざるを得

ない当時の人々の国王観、ひいては世界観を色濃く反映したものであると言える。

そもその内乱の発端は、プランタジネット朝最後の王リチャード二世の王位をヘンリー四世が奪ったことにある。リチャード二世はエドワード三世の孫で、父は十字軍の武勲者として誉れの高い黒太子エドワードであるが、父と違って文人肌で優柔不断であるばかりでなく、阿諛追従に弱い面があったと言われている。国王たる器に欠けるリチャード二世に対して、叔父であるランカスター公ジョン（John of Gaunt）の息子ヘンリー・ボリングブルック（Henry Bolingbroke）は政治的手腕に優れていた。その従弟のヘンリーがリチャード二世を退位させ、自ら王位についてヘンリー四世となったのである。

このいわゆる王位篡奪がシェイクスピアの *Richard II* の主題であるが、劇においては、幼くして即位した Richard の若い頃の優れた資質は一切描かれず、追従に溺れ、浪費と気ままから貴族たちの支持を失ってゆく晩年の二年間が展開されている。必然的に前半は Richard が権力の座から滑り落ちていく、後半は Henry Bolingbroke が権力を手中におさめていく過程となっており、追放の身であった Bolingbroke が Ravenspurgh に上陸し、南下しつつ権力をほぼ掌握する一方、アイルランド遠征から急遽帰国した Richard が援軍に引き上げられて戦意を失い、Flint 城で会見する場面は、まさに王冠という井戸に架けられた上下する二つの釣瓶という Richard の喩え通り、劇の構造と見事に照応している。劇の前半と後半も、Bolingbroke と Richard も、それぞれの出来事も、見事に対応しており、相対的な構成をとっているのがこの劇の特徴であると言える。そのような観点を通して、王冠をめぐる Richard と Bolingbroke はどのように描かれ、それに伴って王権が孕む問題がどのようなものであるのか、またどのような意味を持つのかについて、劇的構成と照らし合わせながら考察する。

II

幕が開くと Richard II の前で、王の従弟 Hereford 公 Henry Bolingbroke は、Norfolk 公 Thomas Mowbray が公金を横領したのみならず、叔父の Gloucester 公 Thomas of Woodstock 暗殺に関わったとして激しく告発する。他方、Mowbray も決然とそれを否定する場面からいきなり劇は始まっている。確かに、幕が開く前の出来事の説明を省略したこの場面の処理に観客は戸惑うかもしれない。が、続く第二場で Gloucester 公爵夫人から夫暗殺に対する復讐を嘆願された時、Lancaster 公 John of Gaunt の「(暗殺者を) 罰する力は、それを犯したものの手にあり」(“correction lieth in those hands Which made the fault”, I. ii.4-5)、「この件の裁きは天に任せるほかはない」(“Put we our quarrel to the will of heaven”, *ibid.*,7) という彼の国王観を示す科白によって、Richard の暗殺の関与と Mowbray との関係が暗示され、それによって劇のサスペンスが保たれる構成になっていると言ってよい。

いずれにしても、Richard は二人を和解させようとするが、両者は応ぜず、結局騎士道に適った馬上試合によって決着をつけることにする。ところがいざ決闘の場面になって突然 Richard は中止を命じ、重臣たちと協議した後、Mowbray には永久追放、Bolingbroke には六年の国外追放の処分を下す。その理由は、王国の土を同胞の血で汚すべきではないにも拘わらず、互いに敵視し合い、野心と嫉妬に駆られて平和を脅かそうとするものだからだと言う。

And for we think the eagle-winged pride
Of sky-aspiring and ambitious thoughts,
With raval-hating envy, set on you
To wake our peace, . . .

(I. iii. 129-32)

いかにも喧嘩両成敗によって、公正な裁きを行い王の威厳を保ったかのように見えるが、前場面（第一幕第二場）における John of Gaunt の苦渋の科白から推察できるように、Gloucester 公暗殺に Richard が関わっているとすれば、正義を声高に求める Bolingbroke は Richard にとってこの上なく厄介な存在であり、またそれだけに暗殺に荷担した Mowbray も同様に危険な存在となる。従って、二人の追放は正義を実践したと言うよりも、後ろ暗い事件を一挙に解決する巧妙な処置であった。言い換えれば、己の犯罪を隠蔽するために、「神の代理人」(His deputy, I. ii. 38) たる王の権限でもって正義を成したかのように見せかけたに過ぎない。所詮そのような一時逃れの策を弄しても、「忌まわしい罪はふくれ上がって腫れものとなり、腐りただれて膿を流す」(foul sin gathering head/Shall break into corruption, V. i. 58-9) ことにつながるとの認識が Richard には欠けている。

「神の選び給うた代理人」(第三幕第二場、57) という〈王権神授説〉に基づく信念を持つ一方で、Richard は猜疑心が強く、嫉妬深い人物として描かれる。例えば Bolingbroke の見送りから帰った Aumerle に、「あの男もおれの従弟ではあるが、時いたって追放の旅より帰国した際、われわれ親族に身内として会いに来るかどうか、疑わしいものだ」(第一幕第四場、20-3) と語る。更に Bolingbroke が国民に人気があるのはご機嫌取りをしているからだ と揶揄し、果てはそれが彼の後釜をねらう下心だと勘ぐりさえする。

Ourself and Bushy

Observ'd his courtship to the common people,

How he did seem to dive into their hearts

With humble and familiar courtesy;

.....

As were our England in reversion his,

And he our subjects' next degree in hope.

(I. iv. 23-36)

また、アイルランド反乱の知らせが入るや、自ら出陣するとは言うものの、日頃の気まぐれと浪費癖から戦費もままならない。結局、王領の一部を貸与し、その徴税権を抵当に借入する、それでも足りないときは富裕なものから取り立てて補充せざるを得ないといった体たらくである。それどころか、叔父 John of Gaunt が重体と知るや彼の死を願い、「彼の金庫の中身をもって、アイルランド征討の兵士たちを美々しく装わせよう」(第一幕第四場、61-2) と決心する。そして John の死の知らせを聞くや「彼の生涯は終わったが、われわれの旅は続くのだ」(第二幕第一場、154) とうそぶき、叔父の全財産のみならず、王族の地位も権利をも剥奪してしまう。いくら「おれは命令すべく生まれついた、懇願することは出来ぬ」(We were not born to sue, but to command;, I. i. 196) 王とは言え、あまりに無節操で非情極まりなく、無謀で無分別と言う他はない。なぜなら、この一件こそ Bolingbroke が正当な地位と権利を主張するため、帰国するきっかけを与えることになるからである。

死の床に臥す John の言葉通り、第二のエデン、地上の楽園とも言うべき「白銀の海に象眼された貴重な宝石」(第二幕第一場、46) たるイングランドは、「不注意な病人」(‘careless patient’, II. i. 97) である国王によって、今や王国全土が荒廃への道を転がり始めている。その根本にあるものは、「王冠の内部には無数の追従者が巣くっている」(A thousand flatterers sit within thy crown, II. i. 100) から、即ち、阿諛追従によって正義が実行されず、王国は「貧しい小作地か何かのように貸し出されている」(第二幕第一場、57-60)、言い換えれば、放漫財政によって経済は逼迫の極みにある。そればかりか、その補填のために次々と重税を課せざるを得ない。いわば財政破綻への路を転げ落ちているのである。従って、今や Richard は「王ではなく、イングランドの地主に過ぎず、国法上あ

なたの地位は法に縛られた奴隷に過ぎない」(Landlord of England art thou now, not king, /Thy state of law is bonds slave to the law, II. i. 113-14)のだと叔父 John から諫められる。事実そのことは、Northumberland 伯や Ross、Willoughby 卿たちの台詞によって裏打ちされる。

Northumberland 伯によれば「王はもう王ご自身ではない、阿諛追従の徒に引き回される人形同然」(The king is not himself, but basely led /By flatterers; , II. i. 241-2) で、告げ口を取り上げて処刑するほど迄に墮落し、最早正義は行われぬ。また、平民からは重税を搾り取り、貴族たちからは昔の紛争を持ち出して罰金を取り立てるので、民心が離れてしまっていると、Ross や Willoughby 卿は国王 Richard に対する失望と憤懣を漏らす。

Will. The king's grown bankrout like a broken man.

North. Reproach and dissolution hangeth over him.

Ross. He hath not money for these Irish wars,

His burthenous taxations notwithstanding,

But by the robbing of the banish'd Duke.

North. His noble kinsman — most degenerate king!

(II. i. 257-62)

このような王としての資質の欠如した Richard 像から、逆に当時の国王に求められる凡そのイメージ (シェイクスピアの国王観) が浮かび上がってくる。まず第一に、「神の代理人」たる王は追従者やお気に入りには振り回されて判断を誤ってはならない。即ち、公正な判断力でもって正義を実践すべきである。第二に、放漫財政に陥ってはならない。放漫財政の結果、重税を課すことは国民を苦しめるのみならず、民心を失わせ、国家の危機をもたらすだけである。第三に、外敵ではなく味方、ことに同族の人間を正

当な理由なく殺めてはならない。それは骨肉相食む果てしない復讐合戦になりがちであるからである。いずれにせよ、これらの要因を満たせない Richard の姿が、劇の前半をしめる構成になっていることは明らかである。

III

斯くして、Richard の国王としての資質の欠如が国家の秩序の崩壊をもたらし、混沌を招来する。「神の前で聖油を塗られた神の代理人」という〈王権神授説〉に安住し、「国を食い荒らす毛虫」(‘The caterpillars of the commonwealth’, II. iii. 165) のなすがままにした結果、国王の中心性が急速に失われてゆく。つまり「親の血を吸うというペリカンのように、(エドワード王の血を) 泥酔するほど飲み干し」(第二幕第一場、126-7)、「食べ過ぎの報いとして病が襲いかかるのだ、今こそ追従の徒が真の味方かどうか試される」(Now comes the sick hour that his surfeit made, / Now shall he try his friends that flatter’d him., II. ii. 84-5) ことになる。

Richard の没収した Lancaster 公の地位と財産回復を旗印に、Bolingbroke が Ravenspurgh に上陸したと聞くや、Bolingbroke 方へ走る諸公諸卿が続出する。のみならず、国民もなびく気配が濃厚である。(The nobles they are fled, the commons cold, / And will, I fear, revolt on Hereford’s side., II. ii. 88-9) その理由と事態は王の寵愛を受けた Bushy、Bagot、Green 達でさえ認識している。

Bagot. And that’s the wavering commons, for their love
Lies in their purses, and whoso empties them,
By so much fills their hearts with deadly hate.
Bushy. Wherein the king stands generally condemn’d.

(II. ii. 128-31)

皮肉にも Richard がアイルランド遠征の間、留守居役を任された York 公は二人の甥への肉親の情の狭間に立たされ、心引き裂かれる思いで Bolingbroke への対応の準備をする。しかしながら、いくらあがこうと今や「浜の真砂を数え、大海の水を飲み干すようなもの」でしかなく「一人が味方について戦えば、千人が敵側に走るだろう」(Where one on his side fights, thousands will fly., *ibid.*, 146) 現実の状況を Green でさえた確に把握している。

にもかかわらず、Bolingbroke 謀反の報に接してアイルランドから急遽ウェールズの海岸に帰着した Richard の「・・・ボリングブルックがかき集めた兵士一人に対し、神は選びたもうたりチャードのために天使お一人をお送り下さるだろう」(第三幕第二場、58-61) という台詞に示されるごとく、現実の状況は逆転していることを Richard は認識しようとしなない。否、出来ないのである。なぜなら、「荒海の水を傾けつくしても、神の塗ったもうた聖油を王たるこの身から洗い落とすことは出来ぬ」(同上、54-5) という〈王権神授説〉にしがみついているからである。ところが正義が行われず、国民の安寧が図られなければ、それは所詮幻影に過ぎない。しかも気まぐれな権力の濫用は、王の求心性を失わせることに繋がる。正に Bolingbroke の世襲財産を不当に没収した際の York 公の言葉通り、Richard は「千万の危険をその頭上に招き、千万の善意の民心を失わ」(第二幕第一場、205-6) ざるを得ない。

そして第三幕を境に、現実と幻影の乖離に Richard は直面することで自己の実体を認識することになる。まず最初に、頼みの綱であったウェールズ軍が国王逝去の噂で解散してしまったという、Salisbury 伯によってもたらされた報告に茫然自失してしまう。そこで Aumerle に激励されると「われを忘れるところであった。おれは王ではないか、・・・王の名は、二万の兵士の名前に匹敵するものではないか。武器を取れ、おれの名よ！」(第三幕第二場、83-6) と再び「神の代理人」の幻影を演じ始める。しかし Scroop の報告によって、Bolingbroke の勢いが領土を覆い尽くすほど

であること、また Bushy 達が処刑されたと知るや、途端に意気阻喪し、
廃位と死に思いを巡らす。そして退位というのっぴきならない極限に身を
置いて初めて Richard は自己の正体に気付き始めるのである。

I live with bread like you, feel want,
Taste grief, need friends—subjected thus,
How can you say to me, I am a king?

(III. ii. 175-78)

「神の代理人」、即ち王権の絶対性という幻影が消え去ったとき、Rich-
ard の口をついて出てくるのが「うつろな王冠」(hollow crown)という
言葉であり、王権の裏に潜むはかなさ、虚しさが自虐的に語られる。

・・・死すべき人間に過ぎぬ

王のこめかみをとりまいているうつろな王冠のなかでは、
死神という道化師めが支配権を握っており、
王の威光をばかにし、王の栄華をあざ笑っておるのだ。
そしてつかの間の時を与えて、一幕芝居を演じさせる、
そこで国王として君臨し、畏敬され、目でもって人を殺し、
まるでいのちを守る肉体という城壁が、永遠に攻め落とせぬ
金城鉄壁であるかのように思い込み、むなしいうぬぼれに
ふくれあがっていると、さんざんいい気にさせておいた
死神めは、時はよしとばかり、小さな針の一刺しで
その城壁に穴を開け、王よ、さらば！ というわけだ。

(第三幕第二場、160-70)

しかしながら、「王権」の絶対性を揺るがせたのは、Bokingbroke の世襲
財産を没収することによって、「時」という継続性を否定したことにある。

それは York 公の言葉を借りれば、「明日という日を今日のあとに続いて来させないことだ。そうなればあなた(Richard)もあなた自身ではなくなられよう、王になられたのは、時の正当な連続によってなのだから」(第二幕第一場、197-99)ということになる。そこにあるのは極めてご都合主義的な自己中心の世界であった。庭師の喩え通り、庭の手入れと同様国の手入れを怠ったがために、「肥やしになると見せかけて実は食べ物にしていた」雑草をはびこらせ、果樹園は荒れ放題の春が来るにまかせていただけに過ぎない。それ故、「おれがふたたび東の空、玉座にのぼるのを見れば、そのまぶしい光をまともにふり仰ぐことは出来まい」と王権に胡座をかいただけの言葉とは裏腹に、「二人の運命は秤にかけられ、王様のほうの秤皿に乗っかってるのは王様ご自身だけ、あとはいっそう軽くするようなお気に入りの軽薄者が少々、それにひき替え、大ボリングブルックのほうの秤皿には、ご自分の他にイギリスの貴族という貴族が全部」(Their fortunes both are weigh'd; /In your lord's scale is nothing but himself, /And some few vanities that make him light. /But in the balance of great Bolingbroke, /Besides himself, are all the English peers, III. iv. 84-8) という、正に王冠という井戸に架けられた二つの釣瓶の一方が上がり、他方が下がる状況に追い込まれて、立場は完全に逆転する。

What must the king do now? Must he submit?

The king shall do it. Must he be depos'd?

The king shall be contented. Must he lose

The name of king? a God's name, let it go.

(III. iii. 143-46)

ところが、暴れ馬を御しかねて、天から地へ真っ逆様に落ちてゆく太陽神の子フェイトンのように、Bolingbroke と会見するために城の下の庭に

降りて行く Richard は、Bolingbroke の目的が Lancaster 家の権利の回復のみであると聞いても、「あんたの膝は低く曲げられていても、あんたの心がこの高さ（王冠を指す）にあること」（第三幕第三場、195）を見抜いている。それというのも、「法に縛られた奴隷に過ぎない」王である現実には直面し、言い換えれば、王の名を奪われれば臣下と同じように「パンを食って生きている」自己の実体を認識し、初めて Richard は人の心の有様を見通す目を持つことが出来たのだと言えよう。

IV

しかしながら、いくら「神の代理人」を演じていたに過ぎないとしても、現実に王の名を失うことは自己の同一性（アイデンティティー）を失うことに等しい。そこで「おれの豪華な宮殿を隠者の小屋にかえよう、おれの華やかな衣装を乞食の衣にかえよう、・・・そしておれの大きな王国を小さな墓に、・・・名も知れぬ墓にかえよう、・・・」と Richard は自己を卑小化し、戯画化し始める。なぜなら、「神の代理人」（正当な王位継承者）である自己と、「王」ではない自己との、いわば一人二役の意識が彼を分裂させるからである。従って、二つに裂かれた自我を統一するためには、自己劇化が必要であった。

..... But he(=Christ), in twelve,
Found truth in all but one; I, in twelve thousand, none.
God save the king! Will no man say amen?
Am I both priest and clerk? well then, amen.
God save the king! although I be not he;
And yet, amen, if heaven do think him me.

(IV. i. 170-75)

更に廷臣たちに向かって「お前たちピラトは、私をむごい十字架へ引き渡したのだ」(第四幕第一場、240-41) と言って自らをキリストになぞらえ、殉教者を演じようとも、王冠の中に巣くう無数の追従者を増長させ、その手入れを怠った「不注意な病人」である王の自己認識の甘さは否めない。がしかし、譬えそうであろうと、否、そうであるが故に、この自己劇化こそ、不注意と慢心をもたらした結果に対する観客の心情を同情に変えてゆく要因なのである。なぜなら、正当な王位継承者でありながら、王の名も権力も失うとき、自己の同一性を喪失しそうになる人間の魂の叫びが聞こえるからである。「私には名がない、称号もない、そう、洗礼のときつけられた名前も今はない、それさえ奪われてしまった。」(I have no name, no title; /No, not that name was given me at the font, /But 'tis usurp'd., V. i. 255-57) という呻きには、王でないことは Richard でもあり得ないという痛切な響きが込められている。しかしながら、Richard 自身が Bolingbroke に同様の仕打ちをしたことは、Northumberland 伯が Richard の言葉を Bolingbroke に伝えるときの「悲嘆のあまりたあいのないことばかり申されます、狂人のように」(第三幕第三場、184-85) という台詞によって観客に想起され、単純に共感するような構成にはなっていない。あくまで相対的に描かれており、純然たる悲劇の主人公たり得ていないのではなからうか。それが長きに渡って、この作品への相反する評価が続いて来た所以であると思われる。

いずれにしても、Richard は「神の代理人」であるときも、王でなくなった後も、自己認識には至り得なかったと言える。そのことは、「よく見るがいい、私が私ではなくなるさまを」と言って王冠を譲り渡した後で鏡に自分の顔を映し見て、いかなる悲しみも己の顔を変えていないことに怒り、鏡をうち砕くところにも窺えよう。そしてまた、Richard が遠征したあと、不吉な予感におびえる王妃を慰める Bushy の「悲しみは一つの実体が二十もの影をもっています、それは影にすぎぬのに悲しみそのもののように見えます、・・・実際には存在しない悲しみの幻影を見てしまわれるので

す、それは、あるがままにごらんになれば、ありもしないものの影にすぎません、・・・たとえ見えても、悲しみの目に映る虚像にすぎません」(第二幕第二場、14-24) という台詞が皮肉な音調でこだまして、Richard への共感に距離を持たせている。

このような相対化は、Bolingbroke が王座についても、依然同様の危険性と不安定さをもっていることを如実に実感させる効果を持っている。つまり、Bokingbroke が王座につくことは、「神の代理人」という王の絶対性を否定した、言い換えれば、相対化したことになるからである。王座が相対的なものであれば、Richard が無力化しても、Bokingbroke にとって脅威であることに変わりはない。従って、彼の意を汲んだ Exton が Pomfret の牢獄の Richard を殺害したのは、Richard が Mowbray を永久追放したのと同様に、当然の帰結と言えよう。

こうして運命の車輪は一巡したが、Exton が Bolingbroke の代行をしたからには、「毒を必要とするものも毒を愛しはせぬ、私もまたお前を愛しはせぬ・・・良心の呵責を、お前の骨折りの報いとするがいい」(第五幕第六場、38-41) という台詞は Bolingbroke が自らに語っている言葉と考えてよい。Richard と同じ立場に立ったことを認識したればこそ (That blood should sprinkle me to make me grow., V. vi. 46)、Bolingbroke は罪を浄めるために十字軍に馳せ参じる決意をするのである。

I'll make a voyage to the Holy Land,

To wash this blood off from my guilty hand.

(V. vi. 49-50)

*

*

*

このような劇的構成を通してみると、Richard が Bolingbroke に言う次の台詞は、王権を持つ者の運命の実相のみならず、この劇の主題を見事に相対化して示している。

あんたの心労がはじまっても私の心労が終わりはせぬ、
私の心労は古い心労が終わって心労をなくしたことにある、
あんたの心労は新しい心労がはじまって心労を得たことにある、
私の譲る心労は捨ててしまったのにまだあるのだ、
それは王冠にともなうはずなのにこの心に残っているのだ。

(第四幕第一場、195-99)

と言うのもこの台詞は、第四幕第一場の冒頭における Gloucester 公暗殺を巡る責任追及の調停をする Bolingbroke と、第一幕第一場冒頭の Richard の調停の場面とが二重写しになっていることを意識させるからである。同時に York 家の Aumerle の謀反騒動とも相俟って、Bolingbroke が苦労の末掌握した王権の虚しさ、危うさが強調され、相対化を通して権力と人間の本質が浮き彫りにされている。Richard 同様、彼が手にしたのも「むなしい王冠」に過ぎなかったと言えよう。

テキスト

Richard II, (ed.) Peter Ure, (London: Methuen, 1956)

参考文献

Lily B. Campbell, *Shakespeare's Histories*, (London: Methuen, 1964)

G. Wilson Knight, *The Imperial Theme*, (London: Methuen, 1951)

Shakespeare: The Critical Tradition, Richard II, ed. Charles R. Forker,
(London, The Athlone Press, 1998)

Shakespeare's History Plays: "Richard II" to "Henry V", ed. Graham Holderness, (London: Macmillan, 1992)